

第三十回 宗教の残虐性

南出喜久治（令和7年11月15日記す）

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

欧州では、祭祀の民の古代ケルト人、原始ゲルマン人などに対するキリスト教徒の暴虐は凄まじいものでした。

いまでは、キリスト教圏では、環境保全だと言つて森林保護を唱へてゐますが、キリスト教が祭祀の民を排除するために、祭祀の民の祭礼の拠点である森林を徹底的に破壊しました。森には悪魔（古代ケルト人）が住むとして森を潰し続けたキリスト教に征服されてしまつた古代ケルト人や原始ゲルマン人は、改宗しない多くの者が殺されて、ローマ化、キリスト教化が進み、一神教を受け入れて祭祀を失ひ、個人所有を受け入れて家産を失ひ、そして自由経済・自由貿易を受け入れて自給自足社会を失つたのです。

欧州における説話に出てくる魔女が住む世界は森です。森を無くせば魔女を追放できます。実は、この魔女は古代ケルト人などの祭祀の民を貶めるための呼称です。

欧米で吹き荒れた魔女狩りや魔女裁判の根底には、絶対神を否定する祭祀の民を完全に排除する目的がありました。

前にも述べましたが、フランスのパリにあるセヌ川の中洲にあるシテ島は、古代ケルト人の部族であるパリジイ人の中心集落で、ここは祭祀の重要な場所でした。これがパリの名前の語源です。ローマ人がここを侵略し、ケルト人を皆殺しにしましたので、今ではケルト文化の欠片もない所となり、森を潰し、石とコンクリートで固めた「軍艦島」のやうな様相となつてゐます。

侵略者の象徴ともいふべきノートルダム大聖堂などが聳え立つてゐるのは誠に皮肉なことであり、この大聖堂が火災に遭つたのは、ケルト人の呪ひであるとまで言はれてゐます。

また、イスラム教の暴力性もまた凄まじいものがあります。『悪魔の詩』事件、シャルリー・エブド襲撃事件などの「名誉の殺人」が繰り返され、イスラム原理主義者によるキリスト教徒などに対する爆弾テロ、イスラム過激派組織 IS による国際紛争などを起こしてゐます。

仏教も同じやうに残虐です。各寺院の僧兵の横暴、一向一揆、法華一揆などは、武力行使する世俗集団と化した姿であり、信長による比叡山の焼き討ちや秀吉による高野山の危

機を招きました。

「進者往生極楽 退者無間地獄」といふ集団自決を強制するに等しい命令を平気で行へるのが宗教なのです。

現在も、ミャンマーの仏教徒のラカイン族がイスラム系少数民族のロヒンギャ族を虐殺してゐるのです。